

次期「長野県文化芸術振興計画」策定に係る有識者懇談会（第2回）

議事概要

日 時：令和4年9月20日（火）午後3時～5時

場 所：長野市生涯学習センター 第3学習室

出席者：

（構成員）金井 直 氏（座長）、石川 利江 氏、小澤 櫻作 氏、北原 節子 氏（オンライン）、
くすのき燕 氏（オンライン）、櫻井 弘人 氏、塚越 亮 氏、直井 恵 氏
（長野県）県民文化部長 山田 明子、県民文化部次長 池上 安雄、
文化政策課企画幹兼課長補佐 小池 貴浩

【会議事項】

（議題1）

次期「長野県文化芸術振興計画」の「めざす姿」について

○塚越 亮 氏

- ・ 誰もが芸術に触れるには、場づくりが大事。 目的をもって集まることも必要だが、気軽に集まる中で身近に感じることも大事であり、企業としてはそういった環境づくりに貢献できるのではないかと考えている。
- ・ 長野県は綺麗な場所や、綺麗と思える環境が非常に多いので、特別な活動を行わなくても、自然を上手く使いながら長野県らしいことが出来たらよいのではないか。
- ・ 我々の会社も、かんでんばばガーデン等の環境を綺麗に保つことで地域の方々に来てもらっている。そういったことも文化芸術のひとつではないかと感じている。

○金井 直 氏（座長）

- ・ 環境特性を生かすことが文化芸術の敷居を下げる糸口となるということは大事な視点。
- ・ 他の構成員から指摘のあった「景観」を生かすという話にもつながる。

○直井 恵 氏

- ・ めざす姿（案）を見ていて思ったこととして、人に関する記載は多く出てくるが、文化芸術が人に対してどう効果があるかについては書かれていない。
- ・ 文化芸術に触れる環境によって、そこに暮らす人達がどうなったらよいのか、基本目標等に書けるとよいのではないか。
- ・ うえだ子どもシネマクラブの活動を行っていて感じることは、映画に触れた子ども達がどうなったらよいのか、何をもって効果があったと評価するかが難しいということ。
- ・ 人がどう変わるかを盛り込むか盛り込まないかで、評価の軸が変わってくる。計画の基礎の部分も含めて、盛り込むべきかどうか議論出来たらよい。

○小澤 櫻作 氏

- ・ 舞台芸術の世界では、何人集客できたら成功など、エンターテインメント性が問われすぎ

ているところがある。それよりも、どういった効果があり、どういった財産を残せたのか、何かをつくるきっかけになったのか等を考える必要があると思っている。

- ・エンターテインメント性のニーズを満たしながらも、集客という物差しでは測れないものがあると考えている。
- ・今回の素案は、課題や役割、目標を社会課題や環境問題を中心に書かれているので、事業を運営する立場としては、この角度で書いてもらえるとやりやすい。その上で、人に対する効果等も例示など上げていただけるとより活動しやすい。

○金井 直 氏（座長）

- ・社会課題や環境問題の解決といった要素は、細目ではなくもっと前に出てきてもいいのではないかと考えている。

○石川 利江 氏

- ・文化芸術が浸透することで、社会やそこに住む人々にどのような変化もたらすことを期待するかを、どこかに文章化することが必要だと思う。
- ・計画を作る過程では、本日のような場で出た共感できる、心に届く言葉が、どうしても文章化に伴って残らなくなってしまう。致し方のないことではあるが、読んだ人が心に残るものを明文化できるようにしたい。
- ・課題として、我々のように文化芸術の近くにいる場合は情報が届いているが、もっと本当に必要な人に文化芸術の情報を届けるにはどうすればよいかを考えなければいけないと思っている。
- ・良い取組が行われていても、その地域の人が何も知らないということが起こっている。そういうところに届く発信ができるとうい。
- ・伝統文化等を「守る」ことも大事だが、常に新しい挑戦をしていかないと伝統文化は守れない。めざす姿（案）の「文化芸術活動を支え、その価値を守り続けられる地域」は、例えば「守り発展させる地域」等にしたらいかがか。

○櫻井 弘人 氏

- ・伝統文化の「保護」や「継承」とあるが、民俗文化は単に形として守り、続ければよいということではなく、地域が先人から受け継いだものを自覚し、再確認することで、地域としての誇りを築き、持続可能な地域づくりや人づくりにつなげることがポイントだと思う。
- ・舞台芸術においても、その土地で優れたものに触れることで、その土地に住み続けることへの幸福感を実感していくことが大事だと思う。
- ・民俗芸能はその価値を共有することによって、逆に過去の歴史などから反省点も出てくる。それらを通じて、この地域がどんな地域であったのかを知ることにより、その地域に住み続けたいと思う人を増やすことが大事だと思う。

○金井 直 氏（座長）

- ・地域の伝統の継承によって課題や価値を共有することは重要。県内の市町村数の多さを踏まえると、いっそう大切な観点である。

○北原 節子 氏

- ・文化芸術による人への効果や、人が育つイメージが「めざす姿」に載るとよいと思った。
- ・例えば「誰もが文化芸術に触れることができる環境」も、素晴らしいものがあって、それを傍観的に見ているイメージを受ける。
- ・触れるところから一歩進んで、「加わる」や「参加する」など、主体的に関わる姿を「めざす姿」に持ってきた方が、人が育つという考え方の中ではよいのではないか。

○金井 直 氏（座長）

- ・表現者と鑑賞者ではなく、実践者と参加者のように、作り手と受け手の二分法を避ける表現や、実際にそのような関係形成が必要かと思う。

○くすのき 燕 氏

- ・めざす姿（案）は総花的に文句のつけようはないが、子ども達や障がいのある方、高齢の方など、社会的弱者と呼ばれる方々がアートに触れるという内容を「誰もが」というところに突っ込んで書けるとよいと思った。

○小澤 櫻作 氏

- ・公共ホールでは役割を重視した活動が難しいという実感がある。
なぜなら説明が必要であり、「それって必要？」と言われしまうと終わってしまう。
- ・それに対してはプレゼン能力を高めていくしかないが、この必要性が県全体で理解されている状況であると喜ばしく、文化芸術活動を行う人々の力になると思う。
- ・役割を重視した事業は成果が数値化できないことがほとんどなので、「見える化」することが必要。県の立場では「見せる化」になるが、活動報告等で「見える化」していくことが大切である。

○金井 直 氏（座長）

- ・各事業者が重い説明責任を負って活動している。そのなかで、この計画で謳われていることが、県下で文化芸術に関わる人々の大きな支えとなるように、計画を練り上げていきたい。
- ・「見える化」について、資料1の「新型コロナウイルスの影響はあったものの、文化芸術を担う人材が各地域に育ち、そのつながりが強まってきたこと、地域が主体となって、その資源を活かした文化芸術活動の芽が育ってきたことなどの成果が上がったと認識」は、今は議論の余地なく、そうだと思いながら読めるが、30年後はどうだろうか。
- ・いま我々が共有している認識をつぶさに言語化し、このとき何が起こったのかを伝えていく、そういった作業を丁寧に続けることが、「見える化」には大事なことだろう。

○直井 恵 氏

- ・コロナ禍を受けた文化芸術の役割の実感については、強く思っている。
- ・新型コロナウイルス感染症が拡大した当初、ドイツのメルケル首相（当時）が「文化芸術は

生命維持に必要」と言ったことに、すごく背中を押された。あれだけの強い言葉をもつことができるのはすごいことであり、そういうものを育むことが必要なんだろうと思う。

- ・公共的な事業として文化芸術を位置付けるのであれば、「ライフライン」や「生活に必要なもの」のように言い切るもっと強いものが計画にあってもよいと思う。
- ・このコロナ禍の3年間で私達が体験してきたことをそのまま言葉にするといいのかもしれないが、これがなくては死んでしまうと切り切るぐらいのことが必要と感じている。
- ・日本国憲法を読んでいると時々泣けてくることがあるが、そういうものを作れるとよい。

○金井 直 氏（座長）

- ・めざす姿（案）の「誰もが文化芸術に触れることができる環境」は、憲法が保障する生存権を再確認しているともいえる。憲法で書かれていることを改めて長野県ヴァージョンで実感を持って語るという意識は重要。
- ・ちなみに、第二次世界大戦の敗戦国の憲法を比べると、芸術の自由に関する憲法上の規定が日本に無く、ドイツとイタリアにはある。戦争中に起こった文化芸術をめぐる悲劇を受けての条文である。日本国憲法に欠けているこの「芸術の自由」を、長野県では謳うぐらいの気持ちで計画をつくることはありえる。

○石川 利江 氏

- ・「文化芸術に触れる」とはよく言われることではあるが、やはり触れるだけでは足りない。感動したり共感したり参加したりなど、何か違う要素を計画に入れたい。
- ・これからより厳しい時代になっていくなかで、文化芸術は私達にとってより必要なものになっていく。
- ・めざす姿（案）に「あらゆる分野で文化芸術が根つき生かされる社会」とあるが、教育や障がい者アートの前に、「人々の心を支える」といった表現があってもよいのではないか。

○金井 直 氏（座長）

- ・なぜ文化芸術なのかという問いや、「人の心を支える」という点が、この計画の前文的なところに位置付けられていくのかもしれない。

○塚越 亮 氏

- ・大きな目的の解説が「めざす姿」であると考えれば、本当の意味での大きな、文化芸術が表す姿がないまま議論をしてしまっている気がする。
- ・長野県の文化芸術が何なのかを、もう一度シンプルに作り上げないといけないのではと感じた。
- ・企業の立場として、社員に上手く伝えるには、複雑に言うては伝わらない。我々の目的を考えた際に、社員に対してシンプルに「社員の幸せ」と言っている。抽象的だが、誰しものが求めるものとして、キャッチフレーズのように共感を得ている。
- ・細かい言い回しなどの前に、そういったことも大事かと思った。

○櫻井 弘人 氏

- ・民俗学や民俗芸能の調査研究で山村に入るが、廃屋や耕作放棄地が目立ち、集落自体が続かなくなっている現状に危機感をもっている。この状況に文化芸術をどう関係させていくかが大事である。
- ・長野県に住み続けたい、長野県のいいものを広めていきたい、と思う人づくりが、持続可能な地域づくりにつながっていくのではないか。 伝統芸能だけでなく舞台芸術にも一致することだと思う。

○くすのき 燕 氏

- ・長期入院している子ども達に人形劇を届ける活動を行っているが、以前、重い病気でどこへも行けない子どものご家族から「自宅でやってほしい」と要望を受け、家で上演したことがある。
- ・このような活動は数値化できない。しかし、そのような状況の人にこそアートが必要。
- ・例えば「幸せ」「生活に不可欠」「人生に不可欠」といったキーワードが計画の前段にあると、アーティストも勇気づけられる。

○北原 節子 氏

- ・「めざす姿」の項目は、全体を端的に表すとこのようになると思うが、その説明文をもう少し内容が分かるようにすると、訴える力を持つのではないか。
- ・例えば「場所」という言葉は、そのまま読むと建物などの意味になるが、「チャンス」や「機会」を含めた意味だと思うので、そういったところを分かりやすく精査するとよいと感じた。

○金井 直 氏（座長）

- ・なぜ文化芸術なのかという問いを立て続ける意義が語られた。
- ・文化芸術基本法のなかでこう定義・説明されているという整理も一つの方法ではあるが、長野県ヴァージョンで言い換えてみるということも試みたい。
- ・この計画があることで、様々な文化芸術活動が支えられるようになるとよい。

（議題2）

次期「長野県文化芸術振興計画」の施策体系（たたき台）について

○小澤 櫻作 氏

- ・「検討の方向性」（資料1）のところで、役割や具体的な取組など、いろいろな話が出たと思うが、それを実現するためには、取るべき行動や身につけなければいけないスキルが大切になってくる。アーティストやアートスタッフ、施設に関わる人など、文化芸術に関わる方々のレベルアップが必要。
- ・県内のアートスタッフの交流が多くないと思っている。交流の場が多くあるとよい。

○石川 利江 氏

- ・たたき台は、取組の方向性のところに具体的なイメージが沸く言葉が入ってきたと思う。

やはり具体的にイメージを持てる言葉があるとよい。

- ・文化に関する財源確保は、少子高齢化が進む中でますます難しい時代になっていく。
これまでの芸術監督団や現在のアーツカウンシルにつながる動きは、2015年の文化振興元年と、文化振興基金の造成であった。
- ・信濃美術館協議会の委員を務めた経験からすると、施設のメンテナンスで予算がなくなってしまい、企画やソフト事業の予算が確保できない。
- ・例えば、「文化芸術を推進する体制の充実」のところに、基金や民間からの財源の確保等について、踏み込めるかは分からないが、何らかの視点で触れてほしいと思う。

○櫻井 弘人 氏

- ・「文化芸術を支える人材の育成」について、人材だけでなく、南信州民俗芸能継承推進協議会のパートナー企業制度のように、企業や民間を巻き込んだものに幅を広げてよいのではないか。
- ・民俗芸能は多様な生活文化を基盤にして成り立っている。広い民俗文化の頂点が民俗芸能と捉えていただくとよいのではないか。
- ・「地域の歴史文化の発信」の取組として、情報発信も大事だが、長野県は広いので他の地域のことを知らない県民も多い。長野県内の情報の共有が非常に大事ではないかと思う。

○直井 恵 氏

- ・「文化芸術に興味のない人も引き付けるような場づくり」や、「教育現場を通じた子ども達への情報発信」などが挙げられているが、今まで文化芸術にアクセスしてこなかった人たちがどこに入る余地があるかと考えていたところ。
- ・うえだ子どもシネマクラブの取組では、中間支援を行う人達の役割が大事である。劇場の体制など基盤がないとできない話ではあるが、プラスアルファで地域に点在する人を繋ぐ役割のコーディネーターが重要。例えば教育委員会にアプローチを行ったり、福祉課等から生活保護を受けてる子どももおり、やるべきことが幅広くなっていて、行政の担当部署の区分で見ても幅広くなっている。
- ・文化芸術に直接関係がないよう関係あるという余地を残していくことが重要と感じている。
- ・映画業界はシニア層に支えられたところで、いま全国で閉館が相次ぎ危機感をもっている。
- ・文化財や文化施設への補助の必要性はもちろんであるが、新しい層を取り入れるなど、もう少し何か必要なことがあると思っている。

○金井 直 氏（座長）

- ・文化芸術にアクセスできる人とできない人がいて、できない人に対して機会を、と話が単純になりがちだが、もう少し文化芸術の手前や周囲でつながるためのネットワーク・インターフェースをどう構築するかが施策上の重要な課題になってくる。

○直井 恵 氏

- ・文化芸術にアクセスできない人の中には、劇場に来るための交通費が払えないという子ど

もがあり、母子家庭世帯には切実な問題。

- ・ 文化芸術は全ての人が享受できるものとするならば、最低限のことは保証すべきというイメージを持っている。

○塚越 亮 氏

- ・ 行政と企業は別という感覚になってしまいがちなので、企業を巻き込む文言を書いてもらうだけでもよいと思う。
- ・ なるべく具体的な言葉を入れることが具体的な施策につながると思う。

○北原 節子 氏

- ・ 小規模の市町村では、文化活動を行う際に大きな支えがあると安心できる。
たたき台の記載から、県立文化会館の人材育成に力を入れることや、市町村と協力していくという方向性が読み取れるのでありがたい。
- ・ 「文化芸術の社会課題解決に向けた展開」の具体的な内容として、福祉分野や環境問題への取組に加えて、その前段で触れられているような教育や地域活性化、交流等に言及いただけるとよいと感じた。

○くすのき 燕 氏

- ・ 「文化芸術に触れる場所の創造」の中の「子ども達が文化芸術に触れ、五感を養う機会の拡大」は、単に拡大ではなく、「長野県の全ての子ども達を目指す」くらいに書いてもらえると嬉しい。
- ・ 北欧の子ども達は年に1回は劇場で鑑賞ができる。知り合いのアーティストになぜ出来るのか聞いたら「人権だから」と言っていた。
- ・ 「文化部門の部活動、クラブ活動の地域主体化への支援」については、クラブ活動を地域へ持っていくという流れが去年あたりから文科省が進めており、これから何年か予算を確保すると思うので、次の5か年で上手くやれるとよい。
- ・ これはある意味、教師に関する社会課題なので、めざす姿(案)②「あらゆる分野で文化芸術が根つき生かされる社会」の方に入れるべきかも含めて、重点課題として取り組めるといい。

○石川 利江 氏

- ・ 「地域の歴史文化の発信」の中の「県立歴史館アウトリーチ活動」は、よくやっているということかもしれないが、最後に何か足さないといけないのではないか。
- ・ 県立歴史館は笹本先生が館長になって大きく変わり、アウトリーチが非常に幅広く行われるようになった。一方で、個人的資質に頼っているものを感じる。
- ・ 地域の歴史館や博物館は元校長先生等の教育関係者が館長に就くことが多いが、芸術への基本的な共感がない方が館長になると、学芸員にとって働きにくくなる。
- ・ 計画には記載しなくてよいが、そういったポストにはクリエイティブなアートを理解する発想がある人が就くとよいと思っている。

○櫻井 弘人 氏

- ・いろいろな災害も起きている中で、人と人を結びつける絆を作るのが文化芸術であるという視点を持ってもよいのではないか。
- ・また、環境問題や社会課題に関連して、多様な価値観などの気づきの場であることも盛ってもよいのではないか。

○小澤 櫻作 氏

- ・やはり人が大切であり、人を育てないと次に進めないということが、めざす姿（案）や、たたき台にも書かれていると思った。
- ・劇場においてアウトリーチ活動やワークショップなど数値目標では評価が高いと言えない事業を進めていくには、スタートラインのところでは個人のキャラクターで進められる。しかし、それを維持・拡大するには、組織の中で人を育てていく必要があると、改めて実感した。
- ・「めざす姿」と具体的な政策の間に、熱い気持ちを書いた方が読みやすくなるでないかという気がした。

○直井 恵 氏

- ・部活動に関しては、上田市でも「うえだイロイロ倶楽部」という取組が「犀の角」を拠点に、映画館やNPOの施設を巻き込みながら展開している。「文化芸術の地域活性化に向けた展開」にもつながるが、商店街を巻き込んで、地域の人にも参加してもらいながら、子ども達が地域に出向くような仕掛けをしており、部活動へも広がる可能性を感じている。
- ・こういった活動を膨らませることで、劇場スタッフの雇用にもつながる。
- ・加えて感じているのは、学芸員や劇場スタッフの労働環境。人材育成の視点に含まれるかもしれないが、劇場スタッフ間の悩みの共有などを、スタッフの養成という観点も含めて、語り合える場が必要ではないか。
- ・「子ども達が文化芸術に触れ、五感を養う機会の拡大」は、「すべての子ども達」という言葉が入るとよい。

○金井 直 氏（座長）

- ・めざす姿（案）②「あらゆる分野で文化芸術が根つき生かされる社会」の中の「文化芸術の社会課題解決に向けた展開」の具体的な取組は、「信州アーツカウンシルと障がい者芸術文化活動支援センターの連携強化」と「環境問題に対する文化施設・アーティスト等の発信強化」の2項目により構成されているが、社会課題解決の具体的取組を増やした上で、地球環境課題関連はもっと上にせり上げて、項目として大きく立てて、その下に環境問題に関する具体的な取組を加えてもよい気がする。
- ・「文化芸術に興味のない人も引き付けるような場づくり」は、「興味のない」ではなく「アクセスできない」に変更した方がよい。
- ・めざす姿（案）③「文化芸術活動を支え、その価値を守り続けられる地域」の中の「県立文化施設と地域の文化施設等との連携強化」について、長野県外や国外の文化施設など、域外の施設との連携によってより強力な相互支援関係をつくるという発想があってもよい。

- ・文化振興事業団の具体的な機能強化も考える必要がある。
- ・「伝統芸能や民俗芸能の記録（アーカイブ）化の推進」等について、歴史館や美術館の収集研究活動力を強化することは当然のことではあるが、既存施設の活動もとても重要なので書いておいた方がよい。

(終)